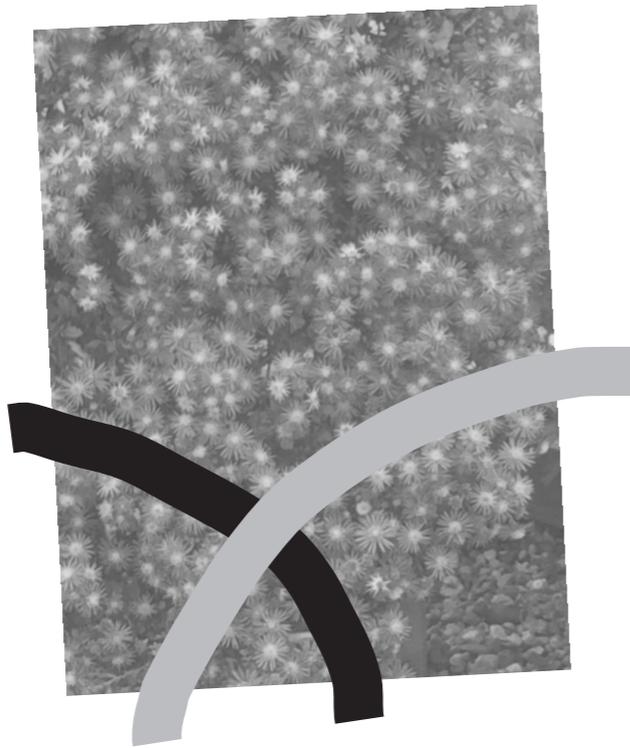

月 刊

MéLange

Vol. 101



2015.04.26

詩と評論

月刊「Mélanges」 Vol.101

2015.04.26

「月刊めらんげ」編集部

詩 & 俳句ほか

水道管が破裂する ……………中嶋康雄 04
 どうぶつたち……………御着かおり 05
 鳥のおばさん……………黒田ナオ 06
 わけありにつき反故二十句／▽十首……………高橋雅城 07
 早春の川……………野口 裕 08
 蒸機式魚眼甲骨文解読器取扱規定……………千田草介 08
 ニライカナイ ……………福田 知子 09
 西側緑道を……………大西久代 12
 おぼろ ……………有時秀記 14
 断章—春の暁に酔いしれず ……………大橋愛由等 15
 未来サイズ ……………中堂けいこ 16
 眺まえ……………岩脇リーベル豊美 16
 羞恥……………寺岡良信 17
 例のカバン ……………月村 香 17
 しるし……………富 哲世 18
 ***代替として ……………高谷和幸 19

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈4〉……………富 哲世 03
 〈詩人通りより〉20「翻訳について思うこと」……………岩脇リーベル豊美 10
 HANA だより 〈10〉映画『神々のたそがれ』アレクセイ・ゲルマン監督遺作……………中堂けいこ 13
 神戸詞あしび90「詩を書くことの困難さについて」……………大橋愛由等 20

編集部だより★22／「月刊めらんじゅ」101号をお届けします。ほぼ毎月続けている「Melange」読書会・合評会も、とうとう三桁の開催となっています。今回の読書会は、発表者は、富哲世さんです。テーマは、「ツェランの詩について(ガダマーの詩理解)」です。「ガダマーの解釈学的方法の一例を紹介したいと思います。ガダマーの著書「詩と対話」(法政大学出版)に基づいて話を進めたいと思います。詩の読書会には、哲学がよく似合います。哲学をもういちど向き合うつもりです、〈大橋記〉

富 哲 世

ひと言詩評 4

墓のうらに廻る

放哉

この句に倣って私は嘗て、知人の葬儀の最中に、読経の続く建て屋の裏庭に廻って見たことがある。そういう経験を一つひとつもきつとあるかと思うが、そこには表の世界のいきりとは別の、湿った翳りの時間が流れていて、なぜかほっと救われた気がした。墓のうらにまわるその事に放哉がほっとしたとは思わないが、それは放哉にとって確かに魅惑的なある種の侵犯行為だったのではないだろうか。

直接的な視覚としてはわたしたちは「裏」というものを持たない。覗いてみたり実際にそこを訪れるか、鏡や三次元的イリュージョンなどを利用する経験的類推のほかは、視覚にとつて物の裏面は「無」である。月に裏側があるかないか、そのコップにほんとうに裏があるかは、確かめて見るしかない。経験によつて裏切られ続ける視覚のため、裏側への欲望は止むことがない。(だからわたしたちは裏のない向こう側の見てとれる、透明に永遠に魅せられるのかもしれない)。

墓のうらにまわつてみるとどうだろう。砂利のあいだにちよろちよろと雑草が伸び、もしかすると風で飛んできた塵屑やビニールの切れ片なども絡んでいて、墓石にはよくみると

ところどころ拭い忘れられた苔なども生えているかもしれない、けれどこの墓石の裏側からいったん世間というものを見返してみると、この裏側の気配になんだか不思議に落ち着いた、孤独の慰めを感じてしまうかもしれない。安住の世界からの視線のように。

「墓のうらに廻る」ことは死の国を訪ねるべく、死の家の領土に足を踏み入れ、翻つて死の世界から生の営まれる光の世界を眺め直す爾後の視線を確保する。生と死の、往還するエンプティチェアの裡に、そのふたつの身近さを教えているのだ。それはいわゆる裏箔のない鏡としてわたしという障壁を通過する視線を与え、死から生を見透すひとつの透明性として、あらたな「空間性」の視座をもたらしている。そしてそれはまた、逝つた彼のひととの和合でもある。死の各自性とハイデガーは言い「存在と時間」、その代理不可能性とデリダは語つたけれども「死をあたえる」、死の世界に一旦足を踏み入れ、そこから生の有り様を見返す、その表と裏の視線の交わるころには、その不可能性の相互了解のうちに、自分を見る自分という、ある種の不死性の回復や、死をめぐる自他一如のはかりごとともめぐらされているのかもしれない。

◆水道管が破裂する

中嶋康雄

ぎよる目の魚だかなんだかさつぱり分らない生きものが水道管の割れ目から飛び出てアスファルト上をのたうちまわるアスファルトを食べ始める糞をし始める糞は真っ黒いものすごく熱い熱噴射する糞に極彩色の非酸素代謝細菌が集積形成する城が現れる小さい人が城からゾロゾロ出てきて歌を歌う歌の言葉は皺まみれの皺よりも古い石の下で皺が寝返りをうつ小さい人が大勢で石をどけるドロドロに腐った皺が灼熱に踊る糞を食べ膨張する

◆どうぶつたち

御着かおり

マヌル猫がいるというから緑の座席に運ばれて市立動物園にいつてみる駅を降りるとすぐに足の指が一本無いフラミンゴが意地悪を仕掛けてくるこんなに天気がよいのにどうしたのだろう……

新しい靴で靴擦れをしながら門を入ると頭に数個トートバッグを置いて眠っているお父さんのベンチはもう寝台となつて男の子はおじいさんに見守られながらおしっこで濡らしたズボンとパンツを下げてしまし立ちすくむその横の花壇では湯気を立てるパンダの顔形をした豚鰻を

どンドン膨張する破裂する欠片になつた皺が降り積もる欠片が這うのたうち回る魚だかなんだかの尻の穴からは細い針金みたいな皺が出てくる長いデロデロ光る皺が外の空気に触れると破裂する緑の臓物が飛び散る飛び散る臓物はしばらく蠢き発光する卵になる卵はふわふわ空中を浮遊する殻にスーッと口が現れる口の笑う頬の皺は水紋のように静かにアスファルト全体を浸食するしばらくすると白い卵の中から話し声が聞こえる声はだんだん大きくなる声はだんだん無条件になる声に呼ばれ水道管を修理するために

食べている親子三人が居てベビーカーを覗き込みながらしゃがむお母さんは失敗しない春の巻き髪キャラメルポップコーンの胸が詰まる匂いは充ちていますそんな風景の中を通る細い道をイケてるデートの彼は微笑みながら軽やかに通り過ぎた

マヌル猫は毛色を確認するのも難しい程太古の遠くに眠っていた白熊は人工の滝に諦観しながら一番上の岩場風な場所に横たわり上脛を白く重くしていく刹那オウムのパペットが欲しいとねだる妹はお姉さんに叱られてずっと泣き止まない象は頬が削げ牙が片方折れているそんな不遇な牙に大切な鼻を乗せ時には絡ませながら丸い足をのっしりと規則的に動かして

やってきた者に皺も名前もない修理をしながら慌てて育つあぶれた修理工が群がってぎよる目の目玉の粘液を啜る啜りながら魚だかなんだかに食われる食われながら仕事を探す魚だかなんだかは白くなり皺が生える皺の間に新しい水道管が埋設される水道管の中で魚だかなんだかのぎよる目の幼体が跳ねる薄い膜が破れる目玉の中を這う血管が発光しカルキに絡まる行き交う発光がネットワークを作るネットワークにインスタントラーメンがドロドロ流れ

ぎよる目の幼体は暗黒のネットワークを回遊する狭い円形に揺蕩っている後ろ歩きをしながら急に足を止めるとボタボタと大量に排便し突然ホースを延ばして排尿をしている長々とそうしてスケッチを楽しむ恋人達は無言になつたりした「そのスケッチブックはどうも小さすぎませんか？」おばあさん主導でぞうさんの歌の合唱は始まります

春風に巻き起こる嚏に咲き始めた桜の花は僅かにフフフと笑ったメリゴーランドの鏡は歪んでいて安っぽいユニコーンが屋根の中心で雄々しいポーズのまま回っているこの黄金の神話の動物はきつと願いを叶えてくれるのだ真っ赤なフラミンゴミルクを飲みたいお父さんはまだ眠っている

◆鳥のおばさん

黒田ナオ

頭のとつぺんにいつも
 一羽の青い鳥を乗っけている
 鳥のおばさんに会いたくて
 児童公園の東向きのベンチまで走って
 いったら
 おばさんはいつもみたいに
 頭に鳥を乗つけたまま
 なんにもせずにただ
 待つてくれている
 待てくれている人のいることが嬉しくて
 おばさんの隣に座る
 鳥たちがやって来る
 おばさんの頭の上にいるのとおんなじ
 青い鳥がやって来る
 頭の上に乗って来る
 右の肩に乗って来る
 左の肩に乗って来る
 手のひらにも
 膝の上にも
 たくさんたくさんの鳥たちが

体のあっちこっちにやって来る
 青い鳥がやって来る
 私は嬉しくて目を閉じる
 体のあっちこっちで
 鳥たちの小さな重みを感じていると
 胸がいつぱいになつて
 気がつく

鳥たちと一緒に空を飛んでいる
 たくさんたくさんの鳥たちと一緒に
 空を飛んで海を渡る
 渡り鳥になつて
 おばさんと鳥たちと一緒に海を渡る
 潮からい空気を胸いつぱいに吸い込んで
 遠い遠い南の島まで海を渡る
 そうしてもうすぐ
 南の島なんだと思うそのときに
 急にお尻のあたりが冷たくなつてきて
 私はいつも
 東向きのベンチでひとり残される
 鳥もいない
 おばさんもいない
 でも本当は
 もうひとりの私が
 そのままずっと空を飛び続けている
 おばさんと鳥たちと一緒に
 ずっとずっと空を飛び続けて

とうとう太陽のまぶしい南の島までたどり着く
 そうして私とおばさんは
 白い砂浜に寝そべつて
 大好きなバナナアイスクリームをなめる
 のだ

私はいつも感じている
 足の裏の
 火傷しそうに熱いざらざらとした砂の感
 触と
 舌の上にひろがる
 冷たくて甘いバナナアイスクリームの味
 私はいつも探している
 胸の奥に住む小さな青い鳥
 いつもひとりぼっちで寒そうに震えている
 私の小鳥を
 そつと抱きしめて
 頭のとつぺんに乗せていてくれる
 優しいおばさん
 鳥のおばさん
 私を待つてくれている人のことを

◆わけありにつき反故二十句

高橋雅城

きょうあすにサラダサラダと春来る
 木登をしてもいいころ涅槃西
 幾何学が成らぬところや雪柳
 力学を無視して桜ふぶきかな
 國という懸念建國記念の日
 エキストラバージンオイルに春愁う
 春風にメロンパンなどいかがです
 遍路宿アンパンマンも泣いている
 桜餅おはぎ草餅アンパンマン
 イースターエッグころころ五六歳
 借りた本人麻呂忌には返します
 何言うもお気に召すまま麻呂忌
 急ぐ仕事あり戸外見る利休の忌
 演芸場幕が引かれて多喜二の忌
 多喜二忌や共産党よりアンパンマン
 一筆と斎藤茂吉忌の夕べ
 よく聞けよ西東三鬼忌が今日だ
 塩からいカツ井喰らう啄木忌
 乗るならば荷風忌蒸気機関車に
 國燃えて残る寺山修司の忌

▽十首

虫の字に二つ並んで窓があり何かいそうで開くのやだな
 平仮名のぬの字が鼠に似ていると行書体ならそうかもしれない
 きみはいま口がへの字だ困ったな▽の口に戻つておくれよ
 夫婦のふよく分かるけどうの文字は何のことやら案じ夜な夜な
 ねとわの字 ○あるなしの違いにてくすくす笑う空には雲雀
 みねむるなすまぬに○の穴があり糸でつないでき
 みにあげるね

めとのの字ツノあるなしが違うけどペコちゃんポコちゃん
 (の) (の) 字のまなこ

去年今年貫く棒は何でしょう？ 一日一善 箸も転ぶよ
 退屈な情交を終え夜鷹蕎麦 嫁がわが家の中国女
 意志堅い石焼蕎麦は真夜中に強い力で鍛えて銀座

◆早春の川

野口裕

嵩を増した雪解け水が轟々流れて
山の側壁にへばりついた車体は
生まれたての蚊となる
ふらふらふらふらと

ついに車幅よりも細い山道となり
「落石のためこの先通れません」と
手書きの立て札
ああやっぱり

己を見据えるため
隠棲した詩人の仮寓へは
なかなかたどり着けない

かろうじてUターンしたあと
下山して迂回路をたどろうか
頼りない道行きだが
お染久松よりは
弥次喜多が似合うはずだ

露の藁を摘むのもよいが
ヤマメを食わず店があつたぞ
思い出話でも聞くとしよう

◆蒸機式魚眼甲骨文解読器取扱規定

千田草介

石炭をば猫の瞳孔に投げ入れると摂氏千五百度のオー
ロラがグラスファイバーを通して島の各家庭に配給さ
れますので港への鯨の不意の接岸を避けるためにやけ
どに重々注意しつつ温泉につかつて三角形の内角の和
すなわち百八十度の方向転換つまり回れ右を柏手を打
ちながら百八度みずからの煩惱を思い起こしつつくり
返し君が代斉唱とともに小学校の校庭に揚げられる万
国旗付アドバルーンに戦勝祈願をしますと商売繁盛子
孫繁栄家内安全滋養強壯はむろんのこと打ち身ねんざ
坐骨神経痛の治療にも効用がありますので自由民主党
推薦候補者選挙事務所の前もしくは窓ガラスに貼られ
るポスター激励文サロンプラスなどより天下万民の為に
裨益することは間違いありませんがただ秘密保護の対
象はくれぐれも慎重に扱わなければなりませんから発
動機は使わず猫の手動式もしくは足踏み式モードに切
り替えて音をたてないように運用することが肝要です。

◆ニライカナイ

福田知子

島のひとときわ切り立つたところ
海岸は小刻みに弧を描く幾つもの入り江になっていて
地元の漁師が拵えたのか その入り江のひとつに浮棧橋が見える
尖った小さな石ころだらけの急な道を
青々と茂った木々から垂れ下がる蔓を伝いながら
海岸まで降りていった
そこには猫の額ほどの珊瑚礁の砂浜が
入り組んだ海岸線に沿って静かに波に洗われていた
樹木に覆われて上の道からはみえなかつた幾つかの砂浜が秘密
のようにある

背後にはアダンやビロウ樹に交じってウバメガシやヘゴの木
ヘゴの木は巨大なシダの葉を放射状に広げた奇天烈な姿の木
これらを視していると妙に太古の昔にいるような気持ちになった
ざわめき揺れる
渴いた熱風と太陽からの熱線に身体から水分が奪われ
皮膚はじりじりと焼かれ 黒く罅割れ てらてら光った

海は
浅葱色から濃い群青へ 青の階段を辿れば水平線の彼方…
——ニライカナイ
この土地の人々が神の国と呼ぶ海の彼方の楽園
この土地の人々は誰もがニライカナイに死後を託しているのか
砂の洞窟にささやかに設えられた祭壇にはワンカップの泡盛が
供えられている

ここから出かける
朽ちかけた浮棧橋の根元にひっそりと繋がれた小舟に乗って
ここから——

〈詩人通りより〉20

水の思い

—ウテ・グッツォーニ

岩脇リーベル豊美

ウテ・グッツォーニ Ute Guzzoni という哲学者の名前はあまり知られていないと思う。彼女はフライブルグ大学の哲学教授で1934年生まれなので今年で81歳になるはずである。私は『居住と漂泊 Wohnen und Wandern』という一冊だけ読んだことがある。インターネットで探すと、当然だがすぐに、彼女の著作の日本語翻訳が画面に現れる。見る限りでは、既に二つの著書『転回 Wendungen』と『変革する思考 Verändertes Denken』が和訳されているようである。この三つの表題からしても、存在よりも生成を本質として思考していることを思わせる。彼女はヘーゲルの『論理学(Enzyklopadie)ではなく所謂「大論理学」と呼ばれているほ

うの)』で博士号取得、その後『アリストテレスの存在学』で大学教授資格を得ている。ドイツの大学では、博士号だけでは通常、大学教授にはなれない。一時期、あまりに長い学生時代を憂いて、若いジュニア教授なるものが導入されたが、気風に合わないのか、いつの間にか聞かなくなり、ポストドクの期間に Habilitation という大学教授資格の課程を経ることが今でも一般的である。ざっとグッツォーニの経歴を見るだけでは、博士父およびハビエル父が誰なのかは特に書かれていないが、年代から見ても、ヘーゲルが最後の形而上学者と位置づけたりしていることもあって、ハイデガーであろうと推測される。

近頃、というかそもそも存在論自体が非常に胡散臭いもの思われて仕方ない部分があるが、昨今の『黒いノート』の騒ぎもあり、彼がナチ過ぎて、ドイツ・ハイデガー協会の会長ギュンター・フィーガルが辞任したというニュースを衝撃と共感をもって聞いたのは既に数カ月前だった。今季の Philosophie Informa-tion なる購読する哲学誌の『ハイデガー主義の終焉』という彼のインタビューを読みながら、この一年10回もしくは11回目になるうとしているドイツ鉄道のストライキの臨時列車に揺られ、ナチズムに対する猛烈な反省からか、労働者の権利獲得のために寛容な国民ではあると思うが、さすがにその頻繁さにもう寛容でいられるはずがないと腹を立てる利用者も急増し、やはり事象はすべて繋がっているかと、ナチ主義が比較的早くに台頭した町での勤務に向かうのであった。

話はまたもすつかりずれてしまったが、グッツォーニはその認識論において On (Ontologie) に取り憑かれずに「生成に存在を刻印すること」を克明に考えていたと記憶する。そこに、先月まったく偶然に、やはりドイツ在住のグッツォーニを知る日本人女性から彼女が編んだ俳句三百選の文庫本を寄贈いただいた。

『白露 雨と霧と海の俳句三百句 Weisse Tautropfen. 300 Haiku zu Regen und Nebel und Meer..』というものの Ute Guzzoni und Michiko Yoneda 選・訳となっている。すでに2006年に Paterga 出版から刊行されている。残念ながら Michiko Yoneda さんには面識がなく、寄贈者に聞いたところによると、グッツォーニを博士母として学位をとり、今は「紀州の田舎」に暮らしている方らしい。ここで驚いたことは、他の哲学同僚に知らせていても、そうか、グッツォーニは日本語ができたのかということである。フライブルグには九鬼周造や手塚富雄などに限らず多くの日本人研究者がいたし現在もいるので、日本語能力があっても不思議ではない。だが、彼女があとがきに選択と翻訳の工程を書いているが、内容の基準として「水 Wasser」に関する季語を持つ句をヨネダさんが数千句から約750句選び出し粗訳をつくり、切れ字や詠まれた背景などの注も付け、その後ドイツ人のほうが選択し、より相応な独訳句を創り出したとしている。「二人の異なる言語能力と知識」をあわせた共同作業で、四週間にもわたる集中的会合を設けたと記されているが、準備には週では済まないほどの時間かかったことであろう。俳句の定式や切れ字等を異言語に翻訳することは非常に難しいが、この共同作業のように言葉の河を築けば、成就には流れ着くような気がする。

グッツォーニは2005年には既に「水」を哲学している。『水：海と泉、河と雨 Wasser: Das Meer und die Brunnen, die Flüsse und der Regen』には「我々の思考が、明確かつ一貫性のある対象性を確定したり固定したりするより確実であるとされる境界線を超越することに成功するならば、水の持つ一豊穰、爽快と浄化、その力と破壊力、動静と動静性、流動的变化、その行き来の変移、折々の他者との刻々変化する相互作用とコミュニケーションに踏み込むことによって、つまり、思惟として水と取り組むことが

可能となるであろう」と。そういえばハイデガーもヘルダーリンの河の詩群を解釈し、水はひとつのエレメントであったな、と思いつくように思うのである。百分の一の句訳を引用。

白露や茨の刺にひとつづつ

shiratsuyu ya ibara no hari ni hitotsu dutsu

Weißer Tautropfen -/ aneinandergereiht/ auf den Dornen der Heckenrosen.

Yosa, Buson (S.7)

見ひらけば菩提樹の花暎れば海

mihirakeba bodaiju no hana tsumureba umi

Öffne ich die Augen,/sehe ich die blühende Linde -/ schließe ich sie, sehe ich das Meer

Satô, Onifusa (S.82)

山川にひとり髪洗うふ神ぞ知る

yamagawa ni hotori kami arafu kami zo shiru

Unbeachtet wäscht sie die Haare/ im Bergbach -/ Gott aber sieht sie...

Takahama, Kyoshi (S.105)

◆西側緑道を

大西久代

通りかかると そこは
桜ふぶきの乱舞で

はらり

うちで結ばれていたヒモが
解かれた

いのちの声を求めていた
眠れぬ鳥となったわたしの夜

無音の響きが裂けてすぎる

あなたが触れない言葉のきりぎりしを
喉を潤らしながら闇にとどまる

雨あがりの空のうつろ

あなたとの言葉の距離を今なら

取り返せる と

ヒモは解かれたか

花びらは木々の根本

をも美しく染めあげて

死が唐突だったから

封印した

昏い未練を絶つための

傷まないあしたを迎えるための

しばり

あなたが馴染んだこの川沿い

眼が挿んだ言葉ばかりよみがえる

置き忘れた手触りを飲み乾していた

忘れないための呪文

弾んでいた日々の耀きへ

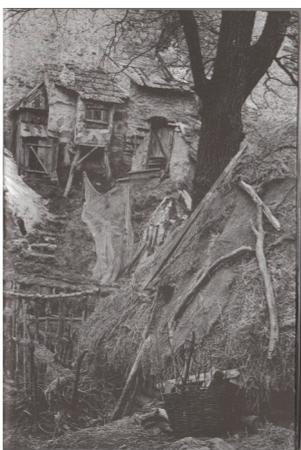
還ろうとする

映画『神々のたそがれ』アレクセイ・ゲルマン監督遺作

中堂けいこ



いずれも映画「神々のたそがれ」より



おぞましい、なんというおぞましき。映画の一般定義をきれいに覆してくれる。モノクロだがむごたらしきのかの世ならぬ惑星アルカナルと説明が入る。雨が続き中世のたたずまいの町はいつもぬかるんで汚物があふれている。人々は襦袢をまとい視線がさだまらない。王宮(たぶん…)でさえ残飯と糞尿がちらかる。カメラが何かにさえぎられ全体がよく見えない、というか見たくもないものがぶらさがっている。人々は頻繁に鼻を手で拭き、その手でカメラのレンズに触れウイंकしたりする。これは何か。恐怖は知識人や芸術家らが次々と捕らえられ残忍な方法で処刑される場面。血肉でそまつた処刑台や拷問の器具。この狭苦しくきたならしい世界はいつまでどこまで続くのか。むごたらしい場面を見せつけられているうちに理解が追いつかなくなり、頭の中に一種の飽和状態が訪れる。ここからだ。(慣れ)のなかで何か引つかかってくるのだ。

『神々のたそがれ』はゲルマン監督の最後の作品となった。私は前作『フルスタリョフ、車を！』を十年以上前に同じ九条のシネ・ヌーボーで見た。その映画もかなりおぞましい内容で、カメラを遮る手法など(スターリン批判が主題であった)よく似ている。かなり覚悟して臨んだ三時間。六〇席ほぼ満員。耐え切れなくなった女性客二名退席。

私はみじろぎもせず喉が固まったまま見入ってしまった。つまり、何か、ここからだと感じるもの、ストーリーのつかめなさの徹底にあるイミが立ってくるのだ。それは何かと思いつくからで、六〇人が六〇いる。個人に委ねられる解釈の映画なのだろう。ポイントが主人公らしい王ルマータ(神といわれるヒトか)が権力者であるのにすつかり倦んでいるように見えることだ。しかも徹頭徹尾、放り出さず何かに耐えている姿。

人間の生の営みの裏側、糞尿、血、肉、吐瀉物、性器、骨、それらを見せつけられておぞましいと、何故あなたは感じるのか。一皮むけば、この汚辱は自身の内側に事実としてある。死体から零れ出る内臓を、恐いものと感ずるのか。

私をゲルマンは問い直してくるのだ。きれいごとを言うなよ、という単純な問いではない。どのような高度な文明を築いても、社会が、人間が、一つ間違えばこのアルカナルなのだ。スターリン全体主義の恐怖体制を生きた人の、映し出そうとする世界観は手法として映画表現になつてしまった、観る人間を探すような、探されるような映画なのだ。まだ見入られたままにいる。

アレクセイ・ユリーエヴィッチ・ゲルマン(一九三八年〜二〇一三年)レニングラード生まれ

◆おぼろ

有時秀記

丸い岩塊がゆるやかな坂を転がり落ちて来ると、反対側から登っていた私と真正面からぶつかってしまう。その岩塊に体を打ち抜かれた私は、その瞬間から「おぼろ」になり、体はもはや意味をなさない。

あちらもこちらもおぼろに見える。百歳翁のおぼろも一歳児のおぼろも共に、私の「おぼろ」に内在する光源である。近親の翁が高熱で、ままならない体を傾けると、「おぼろ」の卵が発生する。「おぼろ」に内在する光源から、卵がおびただしく増殖するのは、夜明け前だ。一歳児の泣き声もまた「おぼろ」の卵を産む。遠い橋を渡って泣き声が聞こえると、おぼろの卵がおびただしく、その橋を超えてやってくる。

しかし、と私の「おぼろ」はつぶやくのだ。こうした卵の「おぼろ」は、私をもはや形作らない。岩塊に打ち抜かれた私は、過ぎ去った私を失い、喪に服している。さようなら、失われた私よ。遠い彼方で、鐘の音が聴こえ、近親の軀が敬意と愛惜をもって失われた私を葬送する。

そのうち、内在の光源から澎湃と沸き立ってきた「おぼろ」の卵がいつせいに孵化の過程をたどるのだ。内在場と名付けられた母なる故郷が、孵化する「おぼろ」によって目指される。そして、わけもなく、時が経過するだろう。

が、峨々たる時の峰を超えて、孵化の旅をする「おぼろ」はつぶやく。これは、出エジプトのようなものだ。彼方の故郷は、しかし、空間を持たないだろう。なぜか。思えば、打ち抜かれた私を、打ち抜いた岩塊もまた、ばらばらに破砕したのだから。岩塊の重要な性質である空間は、知恵の賢人の声に耳傾け、衝突を避けるために自らを消すのだ。だから衝突には寂寥と悲哀がつきまとう。孵化を果たした「おぼろ」によって故郷が目指される。あり得ない彼方の故郷が。母なる故郷は、喪失以後のまたたきの場である。あちこちの場所をさまよい、失い続けた故郷は、岩塊が占めるような空間を持たない。

母なる故郷は、ただ単に「おぼろ」が物に化けた「場」と見立てるのでもない。澎湃と沸き立った驟雨のような磁場のなかに、それは不意にやってくるのだ。行き暮れたのちの場に、「」の無形に依拠したパイの声音の輝きとともに。そして、静かに、静かに、光り続ける。そして。

◆断章―春の暁に酔いしれず

大橋愛由等

小鳥たちのさえざりよ。あなたたちは春河が悲しみを運んでいたことを知っていたのか。きょうも旅人たちは曠野をふみ昨日へと向かってゆく。森を通り抜ける風よ。あなたは教えてくれなかった、昨日と今日の違いを。

雲が多層をなす。山に去るもの、海へ疾走するもの。いつ還ってくるのか、だれも知らない、とだれが言ったのか。小石をひろい宙に投げ、返事を待っているつもりでいる。そのまま佇つていようか、雲たちに拒まれていようか。

わたしは鳥になる準備態。橋が架かつていなくても、名辭に気がねすることなく川向こうに翔んで行けばよい。岐路に怯えることなく、きしみを越え羽ばたけば、いつか見えてくるかもしれない、山々が隠匿している明日についてを。

旅をやめたひとびとは、椎ノ木になるのだと、その樹冠に羽根休めをする未生という名の鳥は、そつと雲に語りかける。倒木の樹洞には、石たちの饗宴の記憶が詰まっています、いかなる風でも読み込めないのだということも。

◆未来サイズ

中堂けいこ

そこにいるのは丸い眼の測量士だった 彼の手のひらの地図はいつも忙しげに脈筋を書き換え 測量の三脚台にのったアリダードの三角の一点をなるべく手のひらからはずれないように しかも測量器の丸い車輪のついた取っ手をにぎりできるだけ地図に忠実に走りまわらねばならないのだった 丸い眼の測量士が汗でびとびとの手のひらから眺める地形は山でも谷でも平原でも宅地でもアリダードの天板の三角のむすんだ一点からいつとぎにして微細な線の集積に変化し 彼の手のひらにはこんもりと森の木々がしげるのだった

そこは森のほずれの入り口をしめす石積みの影だったから大木のざわめきもハシブトカラスの赤い目からも自由であった 森全体は森が承知しているように人間の手のひらの線に写せるものではないのだが丸い眼の測量士は石積みを一つずつ降ろし その石はまるく角を落としたものだった が その一つずつを森の入り口の片側に並べていった (いまではそのひらたい並びが入り口の右側であったか左側であったかわからなくなっているが) 測量士は几帳面に手のひらを森に向け さつと微細な線描の図面を描ききってしまった ハシブトカラスは赤い目を丸くしていまでも測量士の手の上を横切ろうとしている

◆暁まえ

岩脇リーベル豊美

鳥たちの吐く寝息に
目をみひらく夜半

闇が照り返し

乳色の夢から弾き出る
みどり児が淵を渡る

花片の筏は流れつつ
ゆるく静に寄る

さえずりは聞こえず

夜明け前の深黒に
燃え尽きて落ちる未完の月

◆羞恥

寺岡良信

滅びの予感はどこまでも蒼かった
孤独を負ってしまったところは
追憶を拒絶する
月光に浸された
海の記載が
感傷を
弄ばないために

両腕を失つたまま
波の欲情に裸身を曝しつづけてきた
女よ

石に彫られた目は
最期の黎明に洗はれて
はじめて微笑むだらう
いづこの世か

忘却の潮騒にも
確かなものは存在したと
人が知るならば

この日あなたは
その鋳型に鍍はれて
永劫へ帰還する

風が羞恥のやうに
兆すなかを

◆例のカバン

月村香

わたしはFの実践のために雌豹になるのだと
誓ったが本当のところむしろ女になりたいの
かもしれない 半年前に見出された一枚あ
たり二百円のポストカード売りがカバンを隠
してどこか別の地へ行ってしまったわたしは
娘のために(娘たちの増殖)三組のカバンを手
渡したがそのせいで手元に使いやすいカバン
がなくなってしまった彼女はキャンパスのビ
ラを押し込めるバックを探していたのだから
しはその子を失ったとも思わずぶくぶくと泡
をたてるサボンで身体を清め側にいたいとも
思わずカバンを三つ渡してああ許してください
いもうとつても眠たいのですサボテンのよう
なわたしに近寄らない方がいいところであ
たしの新しいカバンがお見せしようにも透明
であるのだ君には見えない

◆しるし

富哲世

なんぼ月謝
要るいうたかて食べるもんちゃんとお食べんとな
みんな居なくなつてからホネお寺にあずけて
仏壇もなんも処分してしもうた
あでやかな磨滅が脈打ち
きょうもひとり とどかない

くるくるみつ豆
タケノコの木の芽和え
まだ続けられるうちはええ
けどあれはクズやな
夕焼けみたいな足をした
悲しいからだが消えてはまた生える
授けられた文法の傾き
自転車を押して止まらずに南から北へ
鏡に向かつてまっしぐら
くたびれた物質が片足を引きながら
ついて来る

◆***代替として

高谷和幸

ぼくは
ならぶ海
となりの重さが息をつめて
増していく塩分の
濃度がよせてくるからだに
—— みにみへの
かたちをあたえることが可能だ
ならぶ海は
盗撮するガラス瓶の中年であるだろう
横にならんで
よこたわれれば
40年が還える（…もつとも過去形のいたみ）
四条河原町の「な」
十字路を出て、東西のいずれかの
次に来るタクシーはどこに現れるか？
テニスボールとゲーム理論の
セリーのもつれが——「に」
—— ふりつむ

スタジアムを見下ろす
高台の観覧車のひとめぐり
杜の奥の
鳶のからまるふた間の小舎で
うぶ声の戦士みたいに
遠く河馬が鳴いている
静かな輝き

とぼとぼとぼとぼ
犠牲となつた
答えだけが歩いている
峠で踊る
のどかな石のかたちだった
嫁のウスを抱いて
のと骨に播かれたことばの種が
また出会うところ
たどり着こうとして
角の向こうに消える
横顔

（あれはぼくとあなたの消えた都市のエンigmaだった）
ぼくたちは
ならぶ海
——の——
もう一つの海
リビアの海のぼくの「ぬ」
（——あなたのぬは鶴だったと告白するよ）
一艘の舟の空間がおしのける海、の
皮を剥くと現れるみずみずしい千の名前
がふりつむ
コーパスの音たち
それがぼくたちの海の「ね」
ならぶ位相へと
青白い蛍のようにガラス瓶をながしてみる
失くした手袋に与えられた名前ほどに
区別がつかなくなっているが
塩分濃度があがるからだに
代替えの
みみが見ていることがある
十字路を曲がって現れるタクシーが
どこに止まるか

うた 神戸詞あしび

90-2015.04.26 大橋愛由等



映画「パブーシャの黒い瞳」の
公式サイトからの引用

詩を書くことの 困難さを考える

口承世界に生きる者が、書き文字の世界に触れ、いままで即興詩として生まれては消える蕩尽の存在であった詩の、かずかずを書き残したとき、はたしてなにが起こったのか——ポーランド映画「パブーシャの黒い瞳」(ヨアンナ・コスリクラウゼ、タンシュトフ・クラウゼ監督、2013)は、詩を書くことの原初的な意味を突きつける映画だった。

ポーランド国内を旅する低地ジプシーのひとりであるパブーシャ(Pabusha)は実在の人物である。「ジプシー初の女性詩人」との映画の謳い文句についてまず言及してみよう。同じジプシーでもスペインでは、フラメンコ・カンテの世界があり、豊潤な詩世界を展開している。ガルシア・ロ

ルカもその魅力にとりつかれ、ヒタノたちから採譜するばかりではなく、フランスのレコード会社から、カンテ・ホンドのレコード制作にもかかわっている。それをしも、詩と言えぬなら、パブーシャはほんとうに「ジプシー初」なのだろうか。パブーシャを見出したポーランドの

詩人であるイエジ・フィツォフスキはこう書く。「パブーシャのジプシー詩だけは、作者本人の手で書かれた形で存在する。彼女はジプシーの世界では類例のない存在、ポーランドのジプシーの中では初めての、意識的に詩を書いた詩人であり、名前を知られた詩人である。」

ポーランドのジプシーたちはロマニ語という独自の言語を持つている。彼らの中には音楽によって生計を立てている集団もいたが、そうした演奏はもっぱら器楽演奏であった。歌詞のある「うた」はポーランド人には分からなかった。自分たちの世界でしか歌われなかったのだ。つまり「うた」は身内で自給されていた(パブーシャは、ポーランド語をほぼ独学で学びロマニ語をポーランド語表記に移し替えて詩を創作した。その詩は行替えなしたった)。かつそうした「うた」も、パブーシャが作る「詩」は、いずれも常にメロディーを伴って朗唱するものだった(パブーシャの詩はポーランド語に翻訳されて出版されているが、「詩」と付随するメロディーは記録されていない)。

しかし口承世界に生きるジプシー社会のあり方がひとつたびエクリチュールという普遍世界に翻訳されるとどうなるのか。イエジ・フィツォフスキはパブーシャの詩を紹介すると同時に、ポーランドジプシーについての書籍を出版することで、一挙にジプシー社会がさらされることとなつてしまった。その結果、身内の恥をさらしたとジプシー集団の中で糾弾され、パブーシャとその夫はジプシーコミュニティから追放されてしまう。パブーシャは精神を病み、「読み書きを覚えなげや幸せだった」と後悔してしまふ。

こうした「口承世界に生きる書き文字という普遍を持たないひとたち」自給された親和性の高い集団に生きるひとたちは、ひとつポーランドジプシーだけに限らず、自分たちのあり方がさらされることに対して、強い警戒心をいだき、自集団を相対化する他者を徹底して排斥する防衛本能を発揮するのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.101
神戸

2015年04月26日 通巻101号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税込)